

# 南方（比島）

数奇の運命に生きて

旭兵団・比島

秋田県 辻原 猪一郎

戦争という、張り詰めた時代の空気の中で過ごした青春時代を、不思議にも懐かしく思うことがある。平和な今日では考えられないことである。人と人が命のやり取りする戦争は良いことではない。国家という組織を背後に残酷な殺し合いをし、そのあとには悲惨な光景だけが残るのみである。また、今日の日本の平和と繁栄が、戦争の尊い犠牲の上に築かれていることを決して忘れては

ならない。

命と平和の尊さを、永遠に語り継がねばならないと思います。私は太平洋戦に従軍して還らぬ戦友を数多く失いました。また戦後五十有余年の今日でも、還らぬ戦友の消息を未だに求めている遺族と、その調査に苦労している人達を思う時、あの戦場を知る者が日々に姿を消していく。人知れずルソンの山野に今なお眠る人が物が言えぬ以上、生を得て還った私達以外に誰がそれを伝えることができようかと日夜悩んでおりました。

昭和十九（一九四四）年末にルソンの戦場に身を投ずることになった一人の人間が、各地で垣間見た戦争と軍隊と人間、そして極限状態におかれた己という人間の従軍記録を、また後世に残すべ

く、じつくりと自分の歩いてきた道を、こつこつと記憶の糸を紡ぎ続けて書き記しておきたいと頑張っているこの頃です。

長い人生では、不調や好調なときもあり、また耐え難い苦難や苦悩の時もあります。そんな長い人生に大きく役立つのが健康であると思います。

商家で育った私は、柔弱で体力のない体質であることを見越して、父は生涯の宝は健康が第一という考えで、大農（大曲農業）第一種本科へ入学を勧められました。入校した当時は日支事変が刻一刻と拡大の一途を辿り、国内では戦争遂行のための物資統制令が施行され、時勢はますます厳しく、毎日の学習時間も少なくなり、農業自習や軍事教練演習と、終日、日が暮れるまで続きました。

心身の鍛錬にはなつたが、学校に来て教科学習授業がない日々寂しく不満いっぱいでした。

卒業後の昭和十八年に徴集兵としては一番最後

の昭和十九年三月二十五日、現役兵として旧東満州の東安総省半載河（ソ連国境にある興凱湖のほとり）の第三国境守備隊に入隊しました。当時、三月末とはいえ当秋田地方とは違い雪は少ないのですが、凍りついた寒さ、零下二〇度を越える道中を物ともせず数百人の入営兵が隊列を組んで一〇キロの道を部隊へと行進しました。

部隊駐屯地から東方約三キロの標高二〇〇メートル位の岩山があり、ソ連との国境に対して部隊の監視哨があつた。岩山には各地各所に地下洞窟が掘られ、要所にトーチカがあつた。銃眼からソ連領に対し砲口が向けてあつた。対面のソ連軍部隊は欧州での独ソ戦のため男性兵士は転出しており、ほとんど女性兵士が多いとの情報だつた。また、我々が入隊する前に、白系露人の将校が逃亡し、我が部隊に亡命を求めてきて、その将校からの情報では「ソ連軍は我が日本軍の隙を見て侵攻してくるのは必至」で、逆に、日本軍は「ソ連軍部隊の欧州戦線へ移動して兵力の手薄な時こそ好

機だ」と主張する幹部将校もおった。

初年兵教育ではソ連軍の攻撃近しの雰囲気で毎日が実戦的演習として対戦車戦を想定しての速射砲、円盤地雷投擲等の訓練が続いた。食糧給与は極寒の冬期が長い地区のため、生野菜の自給自足はできないため不足して、乾燥野菜が多く、また主食は白米飯食は一切無く、高粱、大豆その他の混合米飯が三食続いた。聞くところによると、白米、その他は戦鬪期間の備蓄保管しておるとのことであった。初年兵には甘味品、煙草、日用品等の支給は半月に一、二回で、酒の支給はほとんどなく、また初年兵の外出は一切許されなかった。四月末に幹部候補生教育隊に入隊した。教育中の九月中旬の或る日、動員令が発令ということで部隊本部に呼ばれ、ハルピンの特務機関要員の転出を打診されたが、極力、性格、体力その他等についても不適と強硬に嘆願した。その結果「国家多難な時でもあり、動員令の趣旨は精兵の抽出、選抜

だから御国の為に頑張つて欲しい」と訓辞され、また「幹部候補生教育中だから諦めて欲しい」とのことであった。当時部隊では下級将校人員が不足で、その後、未任官の私を、下士官、兵を含む十四人を引率してハイラル地区部隊に転属命令が下された。

ハイラルへ到着したのは十月五日頃であった。部隊は当時北滿大興安嶺の大平原の守りに任じていた。第二十三師団（旭兵団・原隊・熊本）であった。当師団は昭和十四年のノモンハン事件で敢闘した小松原兵団で、南九州出身の將兵約三万からなる精銳部隊であった。

旭兵団は新編成兵団のため全滿州各地にある関東軍部隊から抽出された兵士が続々と毎日のごとく集合して来た。私は第三国境守備隊で速射砲（対戦車砲）の訓練を受けておったが、新部隊編成の部隊要員は対戦車砲部隊とのことで、全滿各部隊からの砲兵科出身兵とのことだった。兵器は「壹式自走砲七五ミリ砲搭載で一台に五人の兵士

が乗り込む戦車のような車輛であるが、まだ部隊には配車になっていないが、近々日本本土より到着予定」とのことであった。ハイラル兵団各部隊兵舎はハイラル市内より約一〇〇メートル位の丘陵地帯に配備され一大集団をつくっておった。

またハイラル一帯はモンゴル国まで一望千里の大平原が続いており、ハイラル市街地の建物は土壁造りで、緬羊などの動物臭気が一帯に漂っていた。新編成部隊本部指揮班に配属された私は、上官将校などと職務を分担して「壺式自走砲車」の配車を待ち受けていたが、試作製車で生産が不足で部隊への配車みこみなしとなった。

部隊は急遽「師団衛生部隊」となり、戦闘中の傷兵は救出任務の担架三個中隊、負傷兵の看護の衛生兵一個中隊に編成を変えらることになった。また兵力は南方方面軍の増援に転用されるらしいとの情報もあった。

部隊第一一八八部隊を再編成にあたり、一番健康な若い者と健康に異状前歴ある者、召集兵、妻

帯者と三分割され、前歴ある者は外蒙国境の満州里部隊、また、召集兵、妻帯者は当地ハイラル部隊に残置され、そして若い体力のある者は南方要員と決定した。

ともかくにも毎日続々と入隊してくるので、整然とした抽出などはなく、ただ目まぐるしいばかりの繁雑な業務で右往左往せざるを得なかったのが当時の状況であった。

先着の先任将校、上官諸氏の指示に従い、協力して業務に努め、各人の性格、経歴等を勘案しながら、ようやく間に合わせるといふ有様であった。

十月二十三日、師団は台湾防衛部隊として発令されたが、後に比島派遣に変更されたと言われた。当時の我々下級兵士はそのようなことは知るはずもなかった。

十一月三十日、師団各部隊は、ハイラル出発、各隊を乗せた軍用有蓋列車は防諜上窓の鍍戸を閉

めること。車内は敷藁が敷かれており、その上に二十、三十人位が詰め込まれ、窮屈で暑苦しさもあり、臨時停車駅では全員ホームで体操したり息抜きをしたが、衣服の縫い目にはシラムが付いて悩まされた。

十二月四日、釜山駅到着、急造の待機宿舎に入り、身体検査、マラリアその他予防接種を受けた。しかし、待機宿舎に待機中、釜山港出港の日時等一切知らされない。また釜山港埠頭までの往復の間、市街地の道筋には一人の人通りもなく、その上家並みには電灯を灯すこともなく、まるで死の街を歩いているような有様だった。

十二月八日、関西汽船の徴用船「ブラジル丸」に乗船、港内を見渡すと、輸送船五、六隻、護衛艦らしき艦が四、五隻いるのを見た。十日、門司港に寄港、十一日、下関港寄港、その際広島地区編成の特別攻撃魚雷部隊が乗船した。

木造ベニヤ製の船首に一、二台の魚雷を搭載した特攻艇であった。乗船した部隊員を眺めると同

郷、隣町出身の秋山氏がおり、声を掛け奇遇に驚きながらもお互いに励ましあった。また「ブラジル丸」の船首甲板には砲撃機が設置されており、船砲隊長に、私の故郷大曲警察署に勤務されていた佐藤さんが乗船、これも奇遇に驚かされた。

「ブラジル丸」は、再三再四の徴用船として南方諸地域に運船して、船体各所に錆が発生し、各所に破損個所が多く、いわゆる「ボロ船」で、軍用船として修理したことが無いと、船員は嘆いていた。

甲板上には緊急救出用ボートが無いので、竹製の筏が二十台位あるのみで乗船部隊兵用の救命が無く、六〇センチ位の青竹二本に麻縄を通して、それを身体の前後に縛り付け救命用具にするのだとのことで驚かされた。また、その数も乗船隊員の三分の一しかないとのことで、万一、米潜水艦の魚雷攻撃を受け船が沈没したら、竹製救命用具の有無にかかわらず、全員が海難により溺死必至

と話し合った。軍では、ここまで物資が不足しているのかと啞然としたのは私一人ではなかったであらう。

まして乗船隊員は泳ぎができない者は半数以上と多く、私も泳ぎはできない。乗組み船員達も海中に投げ出されては生き残れる可能性はないので諦める覚悟であると申されるにつけ、私達部隊員は、海難死と諦める決心するより仕方なかった。

航海中いかに無事に比島に上陸できるか、ルソン島と台湾の間にあるバシー海峡には米潜水艦が待ち伏せしており、我が軍の数百隻の艦船が撃沈され、日本艦船の墓場だと話されており、一段と海難死を覚悟させられました。

十二月十日、我々は門司港出発、ルソン島サンフェルナンドに向かったが、十三日夕刻長崎県五島列島沖において米潜水艦の魚雷攻撃を受け、編成船団の内二隻が沈没、多数の将兵と兵器弾薬等を失うこととなった。生き残った部隊がサンフェルナンド港に上陸できたのは十二月二十三日のこ

とである。そしてルソン島において米軍が上陸するであろうと予測されたリングエン湾に面した高地に陣地を展開した。

翌昭和二十年一月九日早朝、約一千隻に及ぶ艦船による艦砲射撃と空爆に守られて、続々と上陸する米軍を迎えて迎撃戦を繰り広げ、前線陣地を死守したが、戦況は我が軍に不利で、戦死傷者が続出した。そこで前線将兵の玉砕を憂慮された軍司令官山下奉文大将は各部隊へ後方陣地のバギオ西南方になる山複廓陣地への撤退を下令された。

私は戦中は部隊から命令伝達者としての任務の道筋は二〇〇メートル級の山々が連なる山岳地帯で、幾つもの山を駆けめぐり、川を渡り、谷を越え、断崖をよじ登り、また昼なお暗く密林を昼夜を問わず歩いた。食糧も無く、栄養失調になり、その上マラリア、赤痢に苦しめられながら、単身で任務の遂行に努めました。

ある時は径路に、点々と絶えることなく屍が続き、鬼気迫るものがありました。恐らく、各地の戦場で勇敢に戦い傷つき、これまで生き残った勇士の最後であろう。その無念さを思えば、片手拝みの手さえ挙げられず、黙禱で冥福を祈ることもありません。

また倒れて呼吸も苦しそうな戦友に「生きるんだ、頑張れよ」と掛け声を掛けて元気づけ励ましたのに、一週間もしないうちに、白骨が軍服を着ているような姿になり、哀れであり、合掌して冥福を祈るのみでありました。

私は開戦時から、プログ山麓の最終戦陣地で終戦を迎えるまで、命令伝達者として任務につき、無事生還でき、戦後五十余年になる現在、頑健でいられることを思えば、農林学校在学中の鍛錬の賜物と感慨無量なものがあります。

私のプロフィールは概略次の如くであります。

大正十二（一九二三）年秋田県生まれ、昭和十

九年三月、満州第三国境守備隊入隊。

同十月、ハイラル第二十三師団（旭兵団）衛生隊に転入。同十二月「捷号作戦」により釜山港出帆。比島へ航行中乗船は魚雷攻撃により大損害を受けるも、北サンフェルナンド港上陸（船団九隻中三隻）、湾岸高地に陣地構築。

同二十年一月、米軍大挙上陸し頑強に抗戦するも優勢な兵力、火力のため犠牲増大、衛生隊として負傷兵救出任務につく。部隊命令により連絡将校となり転進するも、バギオ陥落。同年九月初旬、山中にて終戦を知り、二十二年マニラ港より、日本海軍掃海艇にて大村港上陸後復員。